心豊かに杜甫に向き合う
――『杜甫全詩訳注』登場の意味――

安藤　信廣

下定雅弘・松原朗編
杜甫全詩訳注（一）～（四）
講談社学術文庫

文庫判　講談社
［本体2300円＋税／本体2300円＋税／本体1900円＋税／本体2900円＋税］

下定雅弘・松原朗編『杜甫全詩訳注』四巻が、平成二八年六月から一〇月にかけて刊行された。それは刊行というより、登場というのがふさわしい現れ方だった。杜甫の詩を、簡便で、しかも確かな訳注によって読みたいという研究者や漢詩読者たちの期待に応えて、この書は登場したのだと言える。この書の登場によって、杜詩をリュックに詰めて背に負い、旅先で心豊かに読むこともできるし、またこの書を指針にして、たくさんの資料を参照しながら杜詩の深部にわけいることもできる。その両方が、可能になった。

＊

訳注という仕事の最も困難な領域は、翻訳だろう。他の部分も十分に困難なのだが、原文を明晰な日本語に翻訳することは、他のすべての要素を集約してさらに言葉をつむぎだすという、困難な上にも困難な仕事である。この『杜甫全詩訳注』（以下、本書と称する）の大きな意義は、何よりもまず、杜甫のすべての詩について明晰で簡潔な翻訳を示したという点にある。説明的な訳文には、相応の意義があるが、本書の訳文はそういう態度を選ばなかった。本書の訳注に携わった人々は、二人の編集代表者を含めて三七人にのぼるという。そのすべての人々の日本語訳がこれほどの明晰さを持っているということは、驚くべきことと言える。一人一人の高い能力は言うまでもないとしても、恐らく三七人の人々の間で相互に批評し修正する長い努力無しには、この日本語訳は生まれなかっただろう。

＊

訳文を補って、注釈は、必要な場合には説明的で、しかも

最新の研究成果をふまえている。本書の訳注は、清の仇兆鰲の『杜詩詳注』によっている。本書は凡例で、『杜詩詳注』は「杜甫詩の標準的な解釈として今日なお安定した評価を得ている」として、これを底本としている。そして、そこからはみ出す知見・解釈については、語釈あるいは題意、補説で触れるようにしている。訳注の統一性をたもち、且つ、他の重要な解釈や最新の研究成果をとりいれるために、慎重な処置をしたものと言える。

本書の語釈の大きな意義は、最新の学説を各所にふまえていることにある。本書第三巻の、〇八二五（詳注による作品番号。以下同じ）「蜀を去る」詩の題意には、「杜甫が五年間住んだ成都（四川省）を去る際に、流浪の生涯を回顧して詠んだ詩。永泰元年（七六五）の作」と、詳注に従った説明があり、その上で補説には次のように言う。「制作時期を『黄鶴補注』（宋・黄鶴の『補注杜詩』のこと）巻二七は広徳二年（七六四）の閬州滞在期と見る。杜甫はこの時いよいよ蜀を去って長江を下ろうと計画していたが、友人厳武が成都尹（長官）に再任されるとの消息を知って計画を取りやめて成都へと戻る。陳尚君「杜甫の離蜀後の行跡に関する考察」（石井理訳、研文出版『生誕千三百年記念 杜甫研究論集』所収）は、この黄鶴説を支持する」。この補説が重要であるのは、『黄鶴補注』の説が陳尚君の最新の学説につながっていることを知らせてくれるからである。陳尚君の説については、本書第一巻末の論文、松原朗「杜甫とその時代」に説明されている。「厳武は、七六四年春、再度成都に来任した。……（彼は）また朝廷に働きかけて（杜甫のために）中央官である検校工部員外郎を手に入れてやった。「検校」とは一般に、その実務を持たずに中央官の肩書きを帯びることである。ただ近年、これが長安の朝廷において就任を予定された実職である可能性が提起された。杜甫の伝記研究における画期といってよかろう」。この「画期」を提起したのが陳尚君である。こうして、晩年の杜甫が検校工部員外郎という実職に就くために、老病と闘いつつ長安を目指していたとする、従来の考え方とは大きく異なる新しい学説を、本書によって知ることができるのである。

松原朗「杜甫とその時代」は、それ自体が杜甫研究の現在の到達点を示す論文である。平明な筆遣いではあるが、研究の最前線における杜甫像を示すものとなっている。たとえば、杜甫の秦州時代の文学についての指摘がある。華州司功参軍を辞してから秦州にたどりつくまでの間、「約一ヵ月の旅において、杜甫はただの一首も詩を作ることができなかった。秦州の詩は、この「詩の死」ともいうべき空白の後に復活した」と述べ、華州以前と秦州以後の詩の質的違いを明瞭に示

している。

また、七言律詩の実質的な完成者が杜甫だったことをとりあげ、「この事実は、杜甫が貴族文学の最終局面に位置して、そこに有終の美を飾る詩人となったことを証している」と位置付ける。つまり、六朝以来の貴族文学の伝統を、杜甫が全面的に背負っているとするのである。にもかかわらず詩を「宮廷の儀礼空間」に閉じ込めるという態度をとらなかったために「次の時代の文学を先取りするものとなった」とする。杜甫の全体像に関わる、注目すべき発言である。

＊

本書の語釈は、相互に有機的に関連している。たとえば、〇四二四「雲山」、〇八二五「蜀を去る」をはじめ、多くの詩に「鷗」が登場する。〇二三九「独り立つ」詩にも「河間の双白鷗」の句があり、その語釈に、「しろいカモメ。鷗には自由な鳥のイメージがあり、杜甫の詩にしばしば描かれる」とある。そして〇八三六「旅夜　懐(おも)いを書す」詩の補説参照との指示がある。同詩の「天地の一沙鷗」句の補説を見ると、〇四〇一「江村」詩の「相い親しみ相い近づく水中の鷗」等を例とし、「これらの詩における鷗鳥は閉塞疎外感に苦しむ晩年の杜甫にとって、束縛されない自由な心中の飛翔という意味を持つ。『校注唐詩解釈辞典』（松浦友久編、宇野直人執筆。大修館書店）参照」と言う。語釈の連繋によって言葉の世界の奥ゆきが現れてくる。これを手掛かりにして読み方を広げてみると、「相い親しみ相い近づく水中の鷗」等、複数性が示される時のおだやかな充足感、「天地の一沙鷗」と言う時の、孤独でありつつ天地と対峙する生命の誇り等が見えるように思われる。

〇一四八「春望」の初句「国破れて山河在り」を、本書は「国家はことごとく破壊されたが、山や河はもとのまま」と訳している。「国」を、通説のように「みやこ」と訳さず、「国家」としているのである。語釈では、「安禄山の乱によって国家が破壊されたことをいう。一説に「国」を長安と解する。ただし後藤秋正「『春望』の『国』について」によれば、杜甫において「国」が単独で用いられる場合、長安の意で用いられることはない（『東西南北の人――杜甫の詩と詩語』研文出版）」と言う。根拠を示して、「国」を「国家」と訳したのである。そうであれば、昭和二〇年の敗戦に際して、多くの日本人が「国破れて山河在り」の句を肌身に刻む思いで想起したことの意味も分かる。唯一永遠の国家だと思われていた軍国日本が崩壊しても、山河はある。そのように実感した当時の日本人の理解は、正鵠を射ていたと言えよう。

＊

本書第二巻には、下定雅弘の論文「杜甫の詩の魅力――その内容と形式」が載る。この論文は、これまでのように杜甫の文学の「悲しみの面」を偏重してとらえるのではなく、「喜びや楽しみ」の面をも正当に評価しようとしたものである。「人はどんなに苦しい境遇にあっても、何か喜びや楽しみを見出して生きるものである」。「（杜甫も）悲哀と苦悶の日々の中で、数々の喜びを見出して生きている。そのように見れば、次世代の白居易の「兼済」「独善」の人生観は杜甫の詩を読む上で有効な補助線になる」。こうして、「兼済」（人民の窮乏を救うために官職に就き活躍すること）、「独善」（公務を離れた時の私的な場での喜び）という概念を杜甫にも適用し、この両面から杜甫を見ようとする。特に杜甫の「独善」の種々相を示し、新しい杜甫観を展開している。杜甫を複数の側面からとらえようとする、新鮮な視点である。白居易がはっきりと「兼済」、「独善」を区分して方法化したのに対して、杜甫はやや未分化のように、あるいは意識的に重ね合わせているように見えるが、それらの位置付けも含めて、今後豊かな発展が期待される視点であろう。

＊

本書の刊行に先んじて、興膳宏編『杜甫詩注』（岩波書店）第一期全一〇冊が完結した。同書は、先に吉川幸次郎によって第五冊まで刊行され、著者の逝去によって中断されていた『杜甫詩注』（筑摩書房）を補筆・修訂したものである。旧著の基礎を継承しながらも、新たな訳注としての面目を持った大著である。第一冊に収められた興膳宏「解説　吉川幸次郎の杜甫研究」に、「杜甫の境涯と戦後日本の状況との相似性

富永一登著
「文選」李善注の活用
――文学言語の創作と継承
李善注は、文選正文の解釈に必要のみならず、さらに古典文学言語の型の形式を解明する最大の根拠となることを論証する。　12500円

▼富永一登著
文選李善注の研究
10000円

門脇廣文著
洞窟の中の田園
――そして二つの「桃花源記」
洞窟探訪説話としての「桃花源記」は「陶淵明集」所収のものと「捜神後記」とでは質を全く異にする――これを動的に捉える方途を提唱し、さらにこの物語の登場人物の作用を〝物語の展開〟という観点から考察する。　8500円

京大人文研漢籍セミナー
6 目録学に親しむ
漢籍を知る手引き　目録学――俯瞰の楽しみ（古勝隆一）／子部の分類について（宇佐美文理）／目録学の総決算（永田知之）で構成。　1500円

1 漢籍はおもしろい　1800円
2 三国鼎立から統一へ　1500円
3 清華の三巨頭　1800円
4 木簡と中国古代　1600円
5 清玩　文人のまなざし　1900円

研文出版〈税別〉
東京・神田神保町2-7　☎3261-9337
http://www.kenbunshuppan.com/

が、（吉川に）杜詩に関する文章を多く書かせる一つの動機になっていたのだろう」と言う。この文章は、吉川幸次郎の杜甫研究の根底に横たわっていたものを鋭く提示したものである。ここには、吉川幸次郎その人に止まらず、戦後日本における中国文学研究者が何がしか共有した思いが示されていて印象深い。二人の著者が、杜甫の生涯の体験に分け入り、懇切な注釈と翻訳を示しているのは、そのためであろう。同書を、本書と補い合うものとして合わせ見ることを広く勧めたい。

＊

本書は、二人の編集代表者、一〇人の編集委員、三七人の執筆者の協同作業によって完成した。その経緯は、下定雅弘「まえがき」等に記されている。年齢構成も出身学校等も様々であるのに、それを越えて協力して事に当たった三七人の執筆者に、また多くの力をまとめあげて本書の完成という事業を成し遂げた編集代表者に、賛辞を呈したい。

杜甫の文学を開けば、現代の私たちの言葉のあり方、現実に対する姿勢を撃つものにくりかえし出会う。それは私たちにとって、重々しい課題でもある。だが本書の登場によって、杜甫の詩を読むという重々しい課題に心豊かに向き合うことが、間違いなくできるようになったのである。

（あんどう・のぶひろ　東京女子大学）

二〇一七年度　日本儒教学会大会

▼日時：5月14日（日）受付10時～
▼会場：早稲田大学戸山キャンパス33号館3階　第一会議室（東京都新宿区戸山1―24―1早稲田大学文学学術院）東京メトロ東西線「早稲田駅」徒歩3分、学バス・高田馬場駅→早大正門、馬場下町バス停で下車
▼研究発表　10時半～12時半
経と図――清朝における経書の読解法について（廖娟）
江戸前期における道統論と儒家神道（森新之介）
五井蘭洲と崎門の関係について（清水則夫）
伊藤仁斎と陽明学――その思想形成における接近のもつ意味について（阿部光麿）
▼シンポジウム「アジアの中の陽明学」14時～16時
中国陽明学（佐藤錬太郎）／朝鮮陽明学（中純夫）／日本陽明学（小島毅）／司会・進行：前田勉
▼参加費：二、〇〇〇円
▼懇親会：16時45分～18時半　会費二、〇〇〇円
＊参加費、懇親会費は当日受付でお願いします。
＊当日は休日なので閉門しておりますが、学会参加者である旨を言えばお入りになれます。なお係が門に立つ予定でおります。
▼お問い合わせ：日本儒教学会大会準備委員会（〒162-8644 東京都新宿区戸山1―24―1早稲田大学文学学術院　早稲田大学東洋哲学研究室）